

市立病院
開業医

連携強化が一層重要

ニーズ増す在宅医療

気仙沼 災害派遣チームは活動終了

震災直後から気仙沼市内の避難所で活動してきた医療救護班が、今月末で大半の活動を終える。開業医の再開に伴う措置で、今後は地元医師や看護師、保健師らで組織する「気仙沼巡回療養支援隊」などが中心となり、入居が進む仮設住宅や移動困難な在宅患者などへのケアにも重点が置かれる。

震災で新たな要介護者も



高齢者宅などでニーズ把握に努める巡回療養支援隊のメンバー

震災後、市内の避難所では全国から派遣された医師らによる医療救護所が開設され、被災者への診療に当たってきた。ピーク時には25カ所に設置された

東日本大震災

が、地元開業医の再開に合わせて縮小。現在は10カ所で定点診療が行われている。活動の主体となっていたのは、全国の大病院などから派遣された医師や看護師らで組織する医療救護班。気仙沼市立病院の医師や開業医と連携し、約2カ月半にわたって日夜診療に当たってきた。

派遣医師の大半が撤回するが、避難者数が多い市総合体育館などに市内8カ所の避難所について、来月から市

が、地元開業医の再開に合わせて縮小。現在は10カ所で定点診療が行われている。活動の主体となっていたのは、全国の大病院などから派遣された医師や看護師らで組織する医療救護班。気仙沼市立病院の医師や開業医と連携し、約2カ月半にわたって日夜診療に当たってきた。

自宅に戻った人や避難所から仮設住宅に移る被災者が増えるにつれ、必要性が増しているのが在宅診療だ。通院が困難な寝たきり患者や一人暮らし高齢者を地域全体で支えようという動きも出てい

る。気仙沼巡回療養支援隊は、気仙沼市立病院や地元開業医、全国の派遣医師らが中心となり3月末に結成。約20

人のスタッフが訪問診療や巡回健康相談に当たってきた。2カ月間で1428世帯を回る沿岸部の被災地域をローラー作戦で巡回し、孤立した高齢者宅などへの訪問調査を実施。市内の医療、介護、福祉の関係団体と情報を共有し、これまで1428世帯を回り、健康状態や要支援者のニーズを把握しながら、在宅患者への診療ケアに努めている。健康相談チーム(シニア)の担当者は、避難生活で寝たきりが進行するなど、新たに介護を必要とする人が増えている」と指摘する。市内では震災で被災した介護施設や事業所

が、地元開業医の再開に合わせて縮小。現在は10カ所で定点診療が行われている。活動の主体となっていたのは、全国の大病院などから派遣された医師や看護師らで組織する医療救護班。気仙沼市立病院の医師や開業医と連携し、約2カ月半にわたって日夜診療に当たってきた。

自宅に戻った人や避難所から仮設住宅に移る被災者が増えるにつれ、必要性が増しているのが在宅診療だ。通院が困難な寝たきり患者や一人暮らし高齢者を地域全体で支えようという動きも出てい

る。気仙沼巡回療養支援隊は、気仙沼市立病院や地元開業医、全国の派遣医師らが中心となり3月末に結成。約20

津波で診療所が被災しながら、献身的なケアに当たってきた支援隊本部長で地元開業医の村岡正朗さん(50)は「仮設を含めた在宅医療の必要性がより高まっている。市立病院と開業医、さらには関係団体へのつなぎ役として、隙間の支援体制を充実させていきたい」と話している。

死亡	957人
行方不明	532人
避難	3,857人
	(61施設)